

縄文薫る新名所誕生

藤森照信さん設計 新たな発想息づく 竪穴住居

古過庵



「古過庵」の完成を祝うセレモニー

茅野市出身の建築史家、建築家の藤森照信さん(78)が設計し、同市豊平の与助尾根遺跡隣接地に建築した藤森式竪穴住居「古過庵」の完成を祝うイベントが24日、同所であった。9月から約2カ月かけ、国内外から集まった延べ218人とともに力を合わせて作り上げた作品。ちの観光まちづくり推進機構主催のワークショップ(全9回)の参加者ら約50人が集まり、新たな発想が息づく縄文の名所誕生を喜んだ。(野村知秀)

市尖石縄文考古館に隣接し、日本で初めて縄文集落の実像を明らかにした宮坂英式さん(1887～1975年)が調査した与助尾根遺跡には、建築家の堀口捨己さん(1895～1984年)が設計したかやぶきの復元住居が4棟、骨組みのみの住居が2棟ある。

藤森さんが手掛けた竪穴住居はシラカバの樹皮ぶき、土ぶきの特徴。内径約4.5m、高さ約2.5m。地面から約80cm掘っている。樹皮ぶき、土ぶきのため、かやぶきと比べ、防水性、断熱性が高いのが特徴。中心部に炉があり、周囲の壁は樹皮で土留めし、竹の柵で覆っている。床には杉皮の



竪穴住居内で「古過庵」に込めた思いを語る藤森照信さん(中央)

「室内の暖かさだけでなく、住居全体の温かな雰囲気が好き」と語った。

完成祝いでは会場でおこした火で焼いた鹿肉のステーキや鹿汁が振る舞われ、参加者が古過庵を囲んで味わい、笑顔を浮かべていた。藤森さんは「私の考えが詰まった居心地のいい竪穴住居ができた。視覚、触覚、煙たさなど全身で縄文を感じてほしい」と話していた。

「古過庵」の完成を祝うセレモニー
ごぎを敷き、その上に鹿皮が置かれている。炉でたいた火の暖気が逃げにくい工夫がちりばめられている。藤森さんは「縄文人が諏訪地域の厳しい冬を乗り越えるために必要な防寒対策を縄文時代でも調達可能な材料を使って施すことができた」と語った。藤森さんの出身地の同市宮川高部にある藤森さんの作品「高過庵」「低過庵」にちなんで「古過庵」と命名した。

ワークショップに4回参加したという宮下美保子さん(60)「諏訪市は「藤森先生と一緒に作業ができる夢のような企画だった」と振り返り、都内から3回通ったという竹内新乃さん(26)「国分寺市